

## 「村野藤吾の建築 ～志摩観光ホテルを中心に～」

- 講演者：建築史家：笠原一人 氏
- 開催日：2023年 4月 27日



▲ザ・クラシック外観 撮影：笠原一人



▲カフェバー リアン内観

4月27日、通常総会がレストラン東洋軒にて対面で開催され、村野藤吾を研究されている京都工芸繊維大学の建築史家、笠原一人先生にご講演いただきました。JIA三重では通常総会は代々東洋軒で開催しており、総会が対面で開催されるのは4年ぶりで、記念講演会も4年ぶりとなります。

村野といえば日生劇場や目黒区総合庁舎、箱根プリンスホテルなどが有名かと思いますが、三重県では志摩観光ホテル、近鉄賢島駅など近鉄グループの建物を多く手がけており、現存するものもいくつかあります。その中から、志摩観光ホテルにスポットを当て、戦前・戦中・戦後と歴史の流れとともにお話いただきました。

村野と三重県のつながりは、日本軍からの依頼で設計し1942年から44年にかけて建築された津市香良洲の三重海軍航空隊の士官舎、武道場など一連の軍施設に始まり、1944年には鈴鹿市平田に鈴鹿海軍工廠第一会議所(海軍将校倶楽部)を建築しています。



▲記念講演会 東洋軒にて

戦中で建築どころではなかったであろう設計事務所が、軍の仕事で食いつないでいた側面を垣間見ることができました。

やがて終戦を迎え「国定公園の指定を受けた志摩地域に洋式ホテルを!」と三重県からの依頼で志摩観光ホテルは計画されますが、戦後の物資が乏しい時代だったこともあってか、一部は海軍将校倶楽部を移築転用し、1951年に営業を開始しています。

現在の志摩観光ホテルのザ・クラブ(カフェバー リアンにあたる部分)は1951年の意匠を保存継承していますので、移築転用されたことを考えると1944年の海軍将校倶楽部をしのぶことができるということになります。

その後、増築するかたちで1969年に新館(ザ・クラシック)が完成しています。志摩観光ホテルと言って、誰もが頭に思い浮かべるのはこのザ・クラシックの外観だと思いますが、雁行型配置にし、各階に庇をめぐる縦方向のスケール感を抑え、塔屋にも二重三重に屋根をかけるなど、数々の意匠的配慮により中層ホテルでありながら英虞湾の景色と調和がとれていることが理解できました。

また、内観ではロビー天井にみられる大和張り、階段手摺のディテール、レストラン・メールの華やかな空間を演出している天井や家具など、細部にわたり村野デザイ

ンの特徴を解説いただきました。

その後も晩年まで三重県に通い続けたであろう村野ですが、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に保存されている村野事務所の図面から、志摩地方でのアンビルドのホテルの計画図や、未確認の図面まで、秘密の宝物を見せていただくような講演で、会員一同大いに沸き、私も村野建築に魅了され勉強し直さなければと刺激をいただきました。

このレポートをまとめるにあたり、志摩観光ホテルに泊まったのはいつだったろうかと調べてみたところ、サミット直後の2016年でした。そのときは村野建築の知識も空間理解力も足りていなかったようで、もったいないことをしたと後悔の念に駆られます。今回よい機会をいただいたので、復習がてら志摩観光ホテルに泊まってみようかと思っています。いや、さらなる知識を得るために、背伸びして都ホテル佳水園でもいかもしれません。

高瀬 元秀 (JIA三重)  
タカセモトヒデ建築設計

